



波多野 敬雄氏
学習院
院長



紹介者

松井 秀文氏
ゴールドリボン・ネットワーク
理事長

提言

#151

五十年以上、昔の話である。私は外務省から米国のプリンストン大学に送られたが、日本の大学は中退だったので四年制大学の三年に編入された。当時は日本も貧乏で、外交官としての給与を全額大学に払い込んでも足りず、アルバイトしようにも外交旅券保有者は駄目ということで、借金等随分苦労もしたが、今から思えば一生で最も楽しい二年間だった。

それにしても毎日の宿題が多いのには閉口した。講義に当時元外交官で有名な国際政治学者のジョージ・ケナンが教える課目があり、私はこれだけは良い点を取りたいと思って教室での勉強と宿題に加えて彼の著作を何冊か読み、更に対ソ外交で反対論を唱える学者の本も読んだ上で、二十頁程の自信作のレポートを提出した。ところが返ってきた点数はBマイナス。及第ではあるが真中以下の成績である。ガッカリしたというより不思議に思って自分のレポートを捲ってみると最後のページに赤で只一行「貴方の意見は何ですか」と書いてあった。当時の日本の大学で講義と教科書を丸暗記すれば優が取れるものと思い込んでいた私にはショックだった。

次に、卒業に当たって提出する卒業論文を私は締切期限の一か月位前に三百頁程書いて提出したところ、担当教授から呼び出しがあって「よく調べてあるが最高の点のAプラスはあげられない。何故なら自分の提言（レコメンデーション）が明確でないから」と言われて、最後の一月で相当手直しをさせられた。その時教授は、「卒業論文たるものは自分の意見の中に、だからどうすべきか、を書いて欲しい。米国では社会に出てから事実関係を誤りなく質問に答えても、単なる物知りで幹部候補生にはなれない。常に『自分ならこう変えるべし』という自らの提案を準備しておくように」と言われた。

現在、私は幼稚園から高等科までお世話になった母校の学習院の院長を務めており、大学には優秀な教授を集めた積もりだが、五十年以上昔にプリンストン大学で教えられ、今となっては日本でも当たり前と思われることが未だに実現出来ない思いでいる。

次回は **白川 祐司氏**（あおぞら銀行 取締役会長）にご登場いただきます。